

三井のリフォーム 住宅生活研究所長 西田 恭子

リタイアとリフォームの面白み

我が家を「終の棲家」にするため、リフォームは相変わらず高齢の方が多い。数年前まではご主人様の六〇歳定年前後に、奥様が主体となってリフォームに踏み切っていた。確かに仮住まいが必要なリフォームをしようと思ったら、経済的な目途だけではなく、行って帰ってくる引越も必要で、気持ちの面での持久力が持てなければ難しい。

近頃では定年が六五歳に変わった会社も多く、同時にリフォームに踏み切る区切りの時期がわかりにくくなってきた。平均余命も六〇歳を超えると男性は八〇歳を超え、女性に至っては九〇歳超えだ。リタイア後の暮らしが五年ずれ、平均余命も長いとなると家の問題はどうなるのだろうか。家のリフォームの主導権は誰か？ を調べたことがある。六〇歳〜六五歳では奥様主導、六五歳〜七〇歳になると夫と妻が同数の主導権者になり、七〇代になると夫の方が主導権を握るという結果になった。家の事は妻にと思っていた六〇歳前半と、家にいることが多くなった六〇歳後半では

リフォームへの関心度合いも違ってくるのだろう。ましてや、社会でいろいろ決断し、指示する習慣がついているご主人様にとつては、家の大規模リフォームは立派な事業活動で、統括者としての腕の振るいどころでもある。在宅リフォームであればなおさら問題点や改善、改良が気になり、あれこれ意見が出てくる。

奥様にとつて、これは厄介でもありリフォームは早めの時期の方がよく、逆にご主人様にとつてはリタイア後の方がいいことになる。リタイア後は「教養と教育」が大事（今日やることがある・今日いくところがある）と笑い話とされる方が多い中、リフォームは格好のイベントの一つだ。

ご夫婦での協力と理解も必要だ。不足気味だった夫婦の会話も共通の話題で進み、リタイア後の夫婦の暮らし方が見えてくるかもしれない。

リタイアを前に増改築された方から、最近玄関のクロスを変えたいとお話があった。当時の予算では細部に思いついた費用が掛けられなかったのだが、今回

は輸入テキスタイルクロス提案させていただいた。タイル張りにしてグレードアップしたいと言っていたのだが、私自身がつか使いたいと思っていたクロスを提案すると、すっかり心を動かされ即座に決定された。前は悩まないし決められない方だったのに即決され驚いたが、当時の経験で好きなご自身のスタイルを学習されていたのだから。リフォームは何回やっても楽しいものだ。人生も長くなったことを思うと、リフォームは速やかにい、あとは少しずつ楽しむのいいことだろう。今回はタイルをやめたことで予算的余裕が出来、寝室のクロスも張り替えることにされた。

仕事でのリタイア時期が五年延びたといっても、気力はともかく体力の衰えが五年延びたとは思えない。大掛かりなリフォームは元氣なうちに速やかに終えておいた方がいいように思う。そしてまだ長い人生にプチリフォームをしていくことで、その都度グレードアップしていく我が家の暮らしを楽しめたらどうだろうか。



西田恭子氏プロフィール＝一級建築士。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム 住宅生活研究所」所長。リフォーム設計の経験を活かし、新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。日本女子大学非常勤講師。インテリア学会会員。日本建築家協会正会員。